

# マズロー＝ウイルソン欲求理論が含意するもの（I）

肥 田 日出生

## 要 旨

A.H.マズローは、今や「欲求五段階説」と広く通称されている、人間心理に関する画期的なフレームを切り開いた。コリン・ウイルソンはマズローの学説を検討することを通して、新しい境地を追加した。

彼は、マズローのいう「至高体験」をもたらす源を追求して、一つの見解を得た。人が自分に関わる新しい「意味」すなわち「実在感に満ちた純イメージ世界」の奔流を得られた時が、至高体験を得る時だということを見出した。

だが、まだ問題領域は残る。リアルにして新しいイメージ世界を見出すという認知「行為」が、どうして至高の喜びという歓喜の「感情」を触発するか、がそれである。そのゾーンへの足の踏み入れは、次回になされる。

## 目 次

1. アブラハム H. マズロー
    - 1-1. 人の欲求は層をなしている —— 欲求五段階説 ——
    - 1-2. 五欲求の暫定的な意味理解
    - 1-3. 至高体験が含意するもの
  2. コリン・ウイルソン
    - 2-1. ウィルソンが受けた衝撃と考察の開始
    - 2-2. イメージがリアルに感じられるとき至高体験は得られる
    - 2-3. 喜びは意味のうねりからくる
    - 2-4. 志向性と意味とは循環的因果関係にある
    - 2-5. 仕組みがわかったら、意図的に出来るかどうかが問題となる
  3. 残された問題
    - 3-1. 物理的世界と純イメージの世界
    - 3-2. 純イメージ世界にリアリティを感じる力
    - 3-3. ウィルソンの複雑さ
- まとめと展望  
参考文献

註 この論文もまた、話し言葉で書かれる。我々が最も理解しやすい言葉は、日々会話で用いているものである。それが、日々の活きた感覚に最も沿っているからである。近代日本でも、コミュニケーション効率の増大を求めて、書き言葉を話し言葉に近づける運動がなされてきた。その結果、文語文は「である」調に変わってきた。

けれども、「である」調の文体は、まだ、我々の話し言葉と一致したものではない。いわゆる言文一致の運動は、「です、ます」調でもってはじめて完成すると思われる。

もちろん、文章に求められるのはコミュニケーション効率の良さだけではない。美しさ、品格などが一定水準以下でないことも必要にされるだろう。意味伝達の効率はよくても、どぎつさなどがあつて不快感を与えるような場合は、その文体は避けられるであろう。

けれども、日本語の話し言葉が「である」調よりも大きく下品であるとは、筆者には感じられない。むしろ、まろやかで心地よい場合も少なくないと思う。そうしたこともあって、本稿もまた筆者は話し言葉で書き、今後も出来うる限りそう努めていくつもりである。

(4) 承認と尊敬の欲求

(5) 自己実現の欲求

## 1. アブラハム H. マズロー

## 1-1. 人の欲求は層をなしている

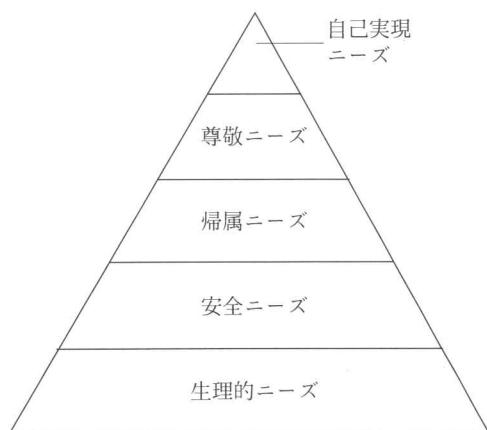
— 欲求五段階説 —

マズロー（A. H. Maslow）という心理学者は、死後時を経るにつれて、徐々にその価値が大きく認められていくタイプの人のようにみえます。彼は人間の持つ基本的欲求を、五つの層でとらえました<sup>(1)</sup>。その理論はいまや、経営学、マーケティング、社会学、脳生理学、臨床医学、看護学など様々な分野で援用されています。

マズロー理論における、基本欲求の五つの層は端的に次のような言葉で表すことが出来ると思われます。

- (1) 生理的欲求
- (2) 安全の欲求
- (3) 所属と愛の欲求

図1 三角形で示されたマズローの欲求五段階説



出所：「マーケティング・ベーシックス〈第二版〉」日本マーケティング協会編、同文館、2001年、75頁。

- (1) A. H. マズロー著、小口忠彦訳『〔改訂版〕人間性の心理学』産業能率大学出版部、1987年、参照。

彼は一般に、(1)の欲求が満たされると(2)が強く発露し、以下同様に(3)(4)(5)と進むとしています。

彼の理論は、しばしば三角形の図におさめて説明提示されてきています。マーケティングの論文や、教科書にもその図を併記する形でもって、しばしば引用されています。図1はその一例です。

けれども、ほとんどの場合それは、ただ参考程度に提示されているだけです。つまり、それを踏まえてある論議が論理的に展開されることはない。端的に言えば、マズロー理論は「不毛」な状態で提示のみなされているのです。これはマーケティングを担当領域とする筆者にとっても、具合の悪いことです。

理由の一つは、彼の理論がまだ十分論理的に消化がなされていないことがあるようにみえます。その結果、かなり示唆に富むように思われるのだけれども、かといって、そこから何かを言おうとしても、なかなか思うようにはいかないということになる。それが実情なようです。

## 1-2. 五欲求の暫定的な意味理解

マズローはフッサール流の現象学的な論述方法をとる人です。一般法則から現象を統一的に説明するよりも、むしろ、対象を巡る様々な現象を個別的に記述していきます。それによって、自分の感得した法則的なものを全体的なオーラとしてわかってもらおうとします。

この方法は、読むものが彼の言わんとしていることを論理的に理解するのに時間を費やさせます。また最終的にも、エッセンスが必ずしもはっきり伝わらず、受け取る人によって、理解にかなりな

隔たりを生じさせることがよくあります。そこでまず確認のためにも、以下に、本稿現段階での筆者の把握を説明してみます。これはあくまでも現段階での暫定的な理解です。

第一の層は「生理的欲求」（引用した図では「生理的ニーズ」となっている）です。これは、食欲、性欲、睡眠欲などです。これらは通常、肉体から直接発せられる欲求だと考えられています。これを満たすことは、人の身体が生存、存続するために必要な条件です。

第二の層は「安全の欲求」（図では「安全ニーズ」）です。これは、身体的に危害が加えられないようにしたいという気持ちや、食欲などが満たされる状態が明日もまた続くことを望む気持です。満たされれば、明日も生存できるわけです。

マズローは、第一層の生理的欲求が一定水準満たされると、次にこの安全の欲求が、意識に強く自覚されるようになるととらえています。

彼のあげた欲求層のうちで最初の二つは、通常肉体的なところに起点を持つものと考えられています。そして残る三つは、精神的なところに起点を持つ精神的欲求とみられています。

第三層は「所属と愛の欲求」（図では「帰属ニーズ」）です。これは特定の集団に所属したり、他者と精神的に交流したり、共鳴、同化したりしたいという欲求です。どちらかといえばこれは、愛に重点を置いて理解すべきものでしょう。生理的欲求が満たされ続けることに心配が少なくなると、人は急に孤独を鋭く自覚するようになる。それで、他者とふれあい同化し合いたいという欲求が発露してくると理解していいかも知れません。

第四の層は「承認と尊敬の欲求」（図では「尊敬ニーズ」）です。他者に承認され、崇められたい、という欲求です。だが、どちらかといえば尊敬をうけることに重点をおいて理解すべきもので

しょう。これはどう理解しておいたらいいでしょうか。次のごとくはその一つでしょう。

すなわち(3)では、横の関係で他者と交流し、同化するだけでよかった。だが、人間というものはそれが満たされると、今度は他者が距離を置いて下から崇め贊美してくれることを望むようになる——と。

第五の層は通常「自己実現の欲求」（図では「自己実現ニーズ」）と呼ばれているものです。この欲求の意味されているところは、このような直訳的な語句ではわかりにくいです。

ここでの「自己」とは、「自分に関わる理想のイメージ」を意味しています。「実現」とはそれを現実の世で実現することです。だから、自己実現とは、きちんといえ「理想として描いた自分のイメージを現実の世の中で実現する」ということです。そこで自己実現欲求とは、それをしたい欲求ということになります。

以上は基本理論です。マズローは、これを踏まえたうえで、現実には様々なバリエーションがあると論じています。

(1)(2)から(3)を飛び越えて(4)に行ったり、あるいは(5)に行ったりするケースも出る。また(5)から(4)や(3)などへと逆行することもある、等々です。充たされえない欲求を、他の段階の欲求で代償することも起きるというのです。

もう一つ興味深いのは次の点です。すなわち、人が(5)の自己実現欲求に注力すると、前段階の欲求が低下する、あるいは満たされなくともかまわなくなることが多い、とマズローはいっているのです。なぜそうなるか。彼はそれを「至高体験（top experience）」感覚がえられるからだとみます。至高ですから、これ以上ない喜びを感じる体験です。

それ故に人は、自己実現に気持ちを入れ込んだ結果、物的経済的環境が悪化したり、あるいは、軽蔑・迫害されたりしても、動じなくなったりもする。この上のない至高の喜びを体験するが故に、その前段階の欲求充足が不十分になってしまっても、もはや彼にとっては問題でなくなる。その状態で意識は安定したままとなりうる——マズローは、こう人間観察しているのです。

### 1-3. 至高体験が含意するもの

第五層の欲求が充たされると人は至高体験を味わうとマズローがいったこと、これは一般には通り一遍に受け取られている傾向にあります（正確には、これから取り上げていくコリン・威尔ソンをのぞいて、ということになりますが）。だが、この概念は広大な視野を含めているように筆者は思います。焦点は「至高（top）」という語にあります。

筆者の知る限りの心理学では、人の欲求には限りがない、ということを当然の前提として考察をしてきたように思います。ある欲求が満たされると、しばらくして次の欲求がでてくる。それも満たされると、さらに、次の欲求がでてくる。そのプロセスは止まることがない、と。

人間の欲求が無限であるというのは自明であるという認識は、一般社会でも長い歴史を通して通念となって来ているのではないでしょうか。「山のあなたの空遠く、幸い住むと人のいう……」という詩が、真理を突いていると感服されてきているのもそれを示唆しています。

ところが、マズローはこの五段階説で「そうではない」と言っているのです。そういうことになります。なぜか？ 喜びには欲求が対応しているからです。喜びは、欲求が満たされることによって得られるのです。

マズローは五段階説でもって大胆にもこう述べているわけです——人間心理には、これ以上はもういらないという至上のよろこび、至高（top）の幸福感がある、と。そういうポイントがあるという。

そういう至福の体験があるならば、それに対応する、最も根底的な深層の欲求（当面そういうおきます）もあるはずでしょう。マズローはそのことをも含意している、と考えられるのです。

すると、マズロー心理学説は肉体的生理的な欲求から、これ以上なく深い根底的な精神欲求に至る領域をカバーしていることになる。それは希に見る包括性を持った、深淵広大な人間心理理論ということもできるでしょう。

そして今日、彼の五段階説は高い妥当性を持っているとおおかたに認められています。だが現状では、この欲求理論を引用する人が、その射程範囲の広大さを十分に自覚しているとは必ずしも言い難いように見えます。

これから取り上げようとしているコリン・威尔ソンは、マズロー理論がカバーする人間欲求範囲の広大さを深層心理学の開祖フロイトと比較して、こう言っています。

「（人間の問題を解決するに）彼（マズロー）は自分の天性に従って問題を解決したのだ——創造性と〈意味ある生存〉への欲望が、いかなる潜在意識下の性的衝動にもまして重要であるという気持ちに従って。」<sup>(2)</sup>

言うまでもなく、フロイトは人間心理の根元を性（欲求）意識に見出した人であります。だが、その程度のものは根元ではない、マズローの視野

---

(2) コリン・威尔ソン著、由良君美・四方田剛己訳『至高体験』河出書房新社、1979年、20頁。

はそれを突き抜けて「創造性と〈意味ある生存〉への欲求」にまで達していたのだ、とウイルソンは言いたそうです。

なお「意味ある生存への欲求」とは、結論的に碎いていえば「自らの存在を価値（意味）あると意識したい欲求」ということになるでしょう。ウイルソンは、至高体験が由来する源を、この〈意味ある生存〉に見出しているのです。それについては後述します。

## 2. コリン・ウイルソン

### 2-1. ウイルソンが受けた衝撃と考察の開始

マズローの欲求学説は、それを論理的体系的に把握しようとする人を、困難に招き入れる性格を持っています。にもかかわらず、この理論に衝撃を受けた若き心理学者がいました。さきほど提示したコリン・ウイルソン（Colin Wilson）がその人です。

いわゆる「マズローの欲求五段階説」は、現時点ではウイルソンの貢献が多大に含まれたものとなっている、と筆者は受け取っています。「マズロー＝ウイルソン理論」と、本稿で呼ぶゆえんです。

ウイルソンはマズロー論文における、至高体験という言葉に、自分の目は釘付けになったと述懐しています<sup>(3)</sup>。その結果、1950年代にすでにマズローと、個人的な交信をしあう関係になっていました。

彼は、マズローの至高体験概念を詳細に検討しないではおられなくなったのです。そこでマズローに（おもに手紙で）質問し、また自説をも提示した。マズローはそれに応答し、両者は文通しあう関係を続けました。

（3） ウィルソン、前掲書、10頁。

結論から先に言えば、そのほとんどをマズローは受け入れています。したがってマズローの理論は、今日では、ウイルソンによって修正されたものだということになるわけです。

修正は、第五層の欲求に関するところに集中しております。けれども、そこはマズロー学説の最重要領域です。ウイルソンの貢献は中枢的というべきでしょう。

だがこのあたりのことは、あまりひろく認知されているとはいいがたい。その点の認知を喚起するためにも、筆者は本稿で必要に応じて、これをマズロー＝ウイルソン理論ということにしたいわけです。

さて、ウイルソンがたずねたところのひとつに「至高体験は意図的に産み出しうるものかどうか」がありました。これに対してはマズローの答えは「ノー」でした。彼はこういっています<sup>(4)</sup>。

「……ほとんど完全にだめです。……私たちは、概して『喜びに驚く』のです。至高体験は思いがけずに来るのです。……それはたとえばすっかり献身できるほど価値のある仕事を、立派になしょえた時の副産物として、副現象として、くるのです」（「……」は中略を示す）。

しかしウイルソンは、そうでもないのではないか、と考えました。至高体験には、もう一つのタイプのものがあるのではないか。自ら意図的に産み出すもの、がそれである。こう考えた彼は、このタイプについて考察を進めていきます。

彼のとった方法は、マズローと同様な現象学的アプローチです。すなわち、様々な体験事象を動員する。そしてそれらから総合的なオーラを得ようと努めています。それは、至高体験全般に関

（4） マズロー、前掲書、14頁。

する、より根底的な考察でもありました。

その結果、彼の到達した結論は「物理的世界と照応するところを持たないような非現実的なイメージが、実在的（real）に思える時に、人は至高体験をうる」のだ、というものでした。碎いて言えば、「現実には存在していない、イメージだけのものがリアルに感じられたとき、これが人が至高体験をするとき」なのだ、ということです。

彼のたどり着いたこの見解は、マズローのいうタイプの至高体験をもたらす要因をも、説明範囲に含める可能性を持つものがありました。なぜか？ マズローがいうところの至高体験とは、理想目標が達成「された」時に、事後的に得られる至高の喜びです。彼はそれを副産物といっています。<sup>(5)</sup>

しかし、こういう副産物は、実は理想の目標が達成されたときに、ある非現実的なイメージがリアルに感じられたからもたらされたのだ、という可能性があるのです。実際、ウイルソンの考察は、実質的にそういう見解につながるものであることが、後にわかってきます。

ところが、このあたりが複雑なのです。ウイルソンは考察を開始するに際しては、マズロー先生の言う至高体験の由来をも説明するものを探求する、とは言っていません。先生のいうのは一つの至高体験である、とする。そして、自分はもう一つのタイプを考察するんだ、という形で考察を始めています。

そしてその姿勢を、途中で明確に組み替えるということはしていません。花道で大見得を切るようなことはしないわけです。

ところが彼は実際には、もっと高邁なところに向かっています。マズローのいうタイプをも含め

(5) マズローは、至高体験がもたらされる由来に関しては、特に思考エネルギーを費やしてはいない。とにかく現象として、そういう感覚が来るんだ、という程度で思考をとどめている。

た至高体験一般をもたらす要因を、結果的には探求しているのです。そして結論的には彼は「……以上のことから、マズローは、至高体験は求めるこことなしに、向こうから〈来る〉ものと誤って信じていたように思われる」<sup>(6)</sup>とだけいっています。何とも舌足らずな論述です。

こういうあいまいな論述をしているのはなぜでしょうか。筆者は、このあたりの彼のスタンスは微妙なものにならざるを得なかったと受け取っています。ウイルソンはマズローの仕事を心底尊敬していました。自分は、マズローの思索を一步深めたにすぎない、というのが彼のいつわらざる心境だったと思われます。

だがウイルソンが、自分はマズロー理論の不完全な点を指摘し修正すると正面切っていって始めたらどうなるでしょうか。彼のうちにある恩師への高い評価と尊敬を、読者が過小視する可能性が大きいのではないか。彼は、そういう不本意な印象を与えてしまうことを大いに恐れたのではないかと、筆者は推察しています。

## 2-2. イメージがリアルに感じられるとき

### 至高体験は得られる

ともあれ、「物的世界に照応しないようなイメージ世界がリアルに感じられることは、人間にはあり得るのであって、それこそが至高の幸福感の源なのだ」という主旨の考えにウイルソンは至りました。こうしたイメージ世界には、たとえばカール・ポパーのいうところの「第三世界」が相当する、とも彼は指摘しています。

またAINシュタインのいう「客観的知覚と思考の世界」もそれに当たると彼はいっている。そのうえで「人間の偉業とは、精神の、知性の、想像力の世界を創造し、それを地図上の現実の国々

(6) ウィルソン、前掲書、16頁。

と同じくらいに実在のものたらしめることにある」とまでいっています<sup>(7)</sup>。

難しい言い回しですが、これについての詳論は後にいたします。現段階で、これをも碎いて言っておくならば「人間はイメージ力、創造力をフルに働かせれば、想像上の世界を物理的世界に対すると同様にリアルに感じることが、可能である」ということでしょう。そういう主旨のことを彼は考えるのは、ウイルソンはまた、それを人類の持つ高次能力の一つであるとも考えています。

### 2-3. 喜びは意味のうねりからくる

ウイルソンの考察を追います。では、イメージが実在的に見える時、人々はなぜ至高の喜びを体験することになるのでしょうか？　ウイルソンは、その時人の意識には、突然の「意味の波のうねり」が生じるからだ、と断言します。

このあたりの彼の考えは、次のようあります。— 彼はまず、現実に存在するものの認知に關して一段と詳細に考えてきます。その結果、「現実に存在する物質であっても、あるひとがそれを実在的に見る程度には、時によって差がある」という主旨の見解に到達します。

そして、人はそれを「実在的に」見るほどに、そこに、「新しさ」を見出すというのです。この新しさがすなわち彼のいうところの「意味」であります。この新しさを人は突然多量に見ることがある、と彼は言います。そして、その時彼の意識には、至高の喜びが生まれるのだ、と。

たとえば、家族のために朝食を作っている若い母親がいます。ある瞬間、窓の外で夫と子供が遊んでいる姿が目にはいる。その時、彼女がいままでに感知しなかった「新しさ」を見出すことがある。するとそれが彼女の心に至福感をもたらすの

(7) ウイルソン、前掲書、22頁。

だ、と。

また、彼は、こういう認識に人を至らしめるものとして、もう一つの心理要素を持ち出します。それが「人間の知覚が持つところの『志向性』」です<sup>(8)</sup>。志向性とは関心のことです。

この関心が高まるほど、人の認知活動での集中力は高まる、と彼は言う。かつ、高まるほどに、ひとはそれだけ対象を実在的（real）にみると指摘するのです。この「実在的に見る」が前述の「新しい意味を見出す」につながっています。プロセス図式として示すならば、それは——「志向性（関心）→集中力→実在的に見る→新しい意味を見出す」ということになるでしょう。

### 2-4. 志向性と意味とは循環的因果関係にある

考察は続きます。ウイルソンはさらに、そうして発見された「意味」は、（ひるがえって）対象をリアルに知覚しようとする「意志」を刺激する、ともいう。そしてその意志が今度は「志向性（関心、興味）」を新たに高める、と指摘するのです。

このように、人間の意識の中で関心と意味とは、互いに相手の要素が一定方向に変化するのを助長し合う、と彼は考えます。高まった関心が、さらに意味を増大さす。その増大した意味が、また、関心をさらに高める、という図式です。経済学者グンナ・ミュルダールの用語でもって言えば、この二つの要素は「正の循環的因果関係にある」ということになるでしょう<sup>(9)</sup>。

こういう因果運動は、ある時作動を開始するで

(8) ここでウイルソンが言う意味での志向性とは、すでにフッサールが彼の現象学において用いた概念と同質なものに思われる。ルートヴィヒ・ビンズワンガーの定義では、それは「何者かに向けられていること」である。ビンズワンガー著、荻野恒一・宮本忠雄・木村敏訳『現象学的人間学』みすず書房、1967年、参照。

(9) グンナ・ミュルダール著、小原敬士訳『経済理論と低開発地域』東洋経済新報社、1966年、参照。

しょう。そういう時がありうるわけです。そのとき、意味の要素に注目してみると、するとそれは、突然的に累積的に増大、多様化していくことになっているはず、となります。それがウイルソンの言う「意味の奔流」に相当しています。そして彼はその運動に、人が至上の喜びを感じる源を見出すのです。

## 2-5. 仕組みがわかったら、意図的に出来るか どうかが問題となる

このようにして、ウイルソンは至高体験が得られる心理的な仕組みを見出していきました。だが彼はここで考究を停めるわけにはいきません。この考察に入るにあたって、出発点としてかかげたテーマは、至高体験は「意図的に得られるかどうか」だったわけですから。彼はその方法をも示すことになります。どうしたら、その境地に入れるか？

論理としては、上記の循環的累積的な因果関係にある要素の一つを、人為的に高められたらしいことになるでしょう。そうすればそれが他の要素に働きかけて、それらが循環的な相互作用を開始していくはずだからです。

すると問題は、志向性と意味とのどちらに手をつけるか、となるはずだ。そして、現実には最初に作動させべき要素は集中力である——ウイルソンはこう考えています。

前述のプロセス図式によれば、集中力は志向性（関心）が高まる結果増大するものです。しかし彼は、意図的にやるには、「集中力」増大というステップから開始するのが現実的だと考えるわけです。

碎いていえば、「対象に関して意識を集中させることでもって、それは可能になる」ということでしょうか。とにかく対象に向かって精神的なエネルギーを凝集させる。そうするとこれまで認知することのなかった事物の新しい意味、言い換え

れば「新しさ」を体験することになる、と考えるのです。

彼はそれを次のように言っています。「(至高体験を得るために) 第一の必須条件は〈エネルギー〉である。それは本質的にエネルギーの噴出であるためである」と<sup>(10)</sup>。意識を集中させることによって、精神エネルギーがその対象に集中的に照射されるというのです。

彼はそれを次のような事例を持ってくることによっても説明しています。

たとえば、子供に「お部屋をきちんと片付けたら、今晚パントマイムに連れていくってあげる」といったらどうなるか。子供は、部屋を片付けるという、通常退屈な仕事に集中するだろう。彼はよーしやるぞ、と〈深呼吸する〉。そして、床の隅々にいたるまで熱心に注意を配る。こういう精神行為の背後には、エネルギーの〈全員待機中〉状態が形成されている。これが、「新しさ」を発見する必須条件なのだ、と<sup>(10)</sup>。

こういう条件を整えることならば、意図的に出来るのだ、と彼は考えるわけです。なお彼はまた、そういう精神エネルギーを〈全員待機中〉状態に高レベルでもって備えられることを「健康」の条件ともしています<sup>(11)</sup>。

## 3. 残された問題

### 3-1. 物理的世界と純イメージの世界

さてここから、筆者の見解を意識的に加味していきます。まず、ウイルソンのいう「意味」とは何かを考えます。言い換えれば、精神エネルギーを全員待機中にすることによって得られる「新しさ」とは何でしょうか？ 彼はそれを「想像の世

(10) ウィルソン、前掲書、17頁。

(11) ウィルソン、前掲書、18頁。

界のもの」ととらえています。けれども、彼のいうこの世界については、若干の注意が必要なのです。

このとき彼は、人の意識にある世界を「物理的世界」と「想像の世界」とに対比させてとらえているのです。彼がこれを、どういう意味で言っているかを詳細に捕まえておく必要があります。

彼はこう言っています。

「牛は物理的世界に住む。ほとんど精神がない世界といえよう。人間もまた物理的世界に住んでいて、この問題に対処しなければならない。」<sup>(12)</sup>

これが彼のいう物理的世界です。他方、想像の世界とはどんなものか。彼は続けます。

「しかし人間は文明を築きあげた。〈物理的世界では十分でない〉ためである。現実にうち負かされるほど嫌なものはない。未開人は、幼い子供と同じ理由から説話を好む。説話によって現実から逃避でき、単なる〈現実〉から記憶と想像力を解き放つことができるためである。」と<sup>(12)</sup>。

だがそもそも、人の意識の中にある世界は、みな広い意味でのイメージの世界であります。ウイルソンのいう「物理的世界」もまた、イメージとして存在する物理的世界なのです。

ウイルソンがそのあたりを自覚しているかどうかは、定かではありません。言葉の上ではそういう論理展開が明確にされておりません。けれども、ここは同じイメージとしてある世界を、二つに分けていると解釈してあげることが必要です。そうでないと、以後の考察を進めることができ難くなるのです。

すなわち、彼が「物理的世界」と呼んでいるのは、正確に言えばそれは「(五感で認知できる)

(12) ウイルソン、前掲書、22頁。

物理的世界とイメージとを照応できるような」イメージの世界なのだ、と。それでいきましょう。

では、「想像の世界」とは？ それは「我々が五感で認知出来ないようなものを照応対象（もし存在するならば）としているような」イメージ世界ということになります。それは物理的世界からの残像を起点にしたり、それと照応したりすることのない世界です。その意味で、「純(粹)イメージの世界」と言つていいくかも知れません（ウイルソンが〈意味のある生存〉という場合の「意味」というのもそれ自体としてはひとつの純イメージです（これについては「価値」と共に次稿で論ずる予定）。

ここでは、前者を「物理的イメージ世界」と、後者を「純イメージ世界」ということにでもしましょう。そうするとはじめて次の言葉の意味もシャープに擋むことが出来てきます。これはウイルソンが続いて言っている言葉です。

「AINSHUTAINもおなじ点を突いている。『……人間を芸術や科学へと導く非常に強い動機の一つは、未完成の苦しみや望みなき夢を手に、日常生活から逃避することにある。……すぐれた気質の持ち主は個人的生活から、客観的知覚と思考の世界へと逃避する。この欲望は、市井人が喧噪と不自由の環境を離れ、高山の静寂に向かわんとする抗しがたい憧れにも比すことが許されよう。』」<sup>(13)</sup>

ここでいっている「個人的生活」の本質は「物理的イメージ世界」であり、「客観的知覚と思考の世界」の本質は「純イメージ世界」なのです。それがわからないと、何を言っているかわからなくなります<sup>(14)</sup>。特に「客観的知覚と思考の世界」

(13) ウィルソン、前掲書、22頁。

(14) 客観的世界とは、視覚に直接キャッチされる世界ではないわけである。それはAINSHUTAINがこれから発見していく法則の世界であって、彼以外の人にとってはほとんどファンタジーの世界なのである。

というのは客観的という言葉によって、むしろ「物理的なイメージ世界」と間違って受け取って行きやすいのです。そうなったら、以後彼の言わんとするところはわからなくなってしまいます。

### 3-2. 純イメージ世界にリアリティを感じる力

そして、ウイルソンは、純イメージ世界に対して物理的イメージ世界に対すると同様にリアリティを感じる能力が、人間には与えられているのだ、と考えたのです。これは彼の論議のポイントです。ポパーの「第三世界」は、彼のあげたその一例であります。

それについて彼はこのようにいっています。

「すべての知覚が〈志向的〉であり、〈手を伸ばすこと〉〈焦点を合わせること〉に帰するならば、必要なだけ焦点を合わせ努力をするだけで現実を再構成することも可能であるべきだ」と<sup>(15)</sup>。

「知覚が〈志向的〉であり」というのは、前述したように「知覚というのは、意識が特定のゾーンに向かって集中されることによって実現するのであって」という意味です。「現実を再構成する」というのは、「純イメージについて、物理的イメージ世界と同様にリアルなイメージを構成する」という意味でしょう。

なお彼は、そのことは従来（の心理学では）気付かれてこなかった、と考えます。理由は「わたしたちは、〈受動的な知覚〉という旧い誤った学説のおかげで、この認識から遠ざけられてきたにすぎない」ことにあるのだと、彼はいっています<sup>(16)</sup>。

(15) ウィルソン、前掲書、29頁。

(16) ウィルソン、前掲書、29頁。

ここでの〈受動的な知覚〉というのは、あまりいい訛語ではない。ここは「知覚とは受動的なものである」とすべきだろう。要するに、「知覚イメージ」というのはすべからく外部の物理的存在か

ともあれ、ウイルソンは上記のことをマズローに気付かせようとして問い合わせをおこなっています。その際、彼は、人の性的な行為をとりあげている。本稿においてそれをそのまま引用するのは、慎重を要すべきようにも思えますので、これ以上の記述は避けます。

ウイルソンはこの例を挙げながら、人間が能動的に純イメージを描き、それをリアルに知覚する能力を持つことを論証しています。つまり、物理的には異性がそこに存在していないにもかかわらず（物理的世界からの刺激を受けることなくして）想像力によって（リアルに世界を構成し）、性的絶頂にまで運ばれるということが人間には出来るのだ、というのです。

彼はそれを猿には出来ないが、人には可能なのだと主張します。そしてマズローはといえば、若干のやりとりの後、ウイルソンのこの論証を容認しています。

### 3-3. ウィルソンの複雑さ

ここで看過してはならないことがあります。それはウイルソンが見出したことが通用する範囲についてです。ここで彼は、純イメージ世界がリアルに感じられるという事態を、至高体験一般に妥当する共通原因として見出しているのです。

彼は出発点では、マズローがいうのとは別の、もう一つの至高体験タイプを追求するというスタンスをとっていた。それは前述しました。けれども、彼の見出したのはむしろ一般的な原理です。それに沿って行えば、誰でも意図的に至高体験を味わうことが出来る、というのですから。そして

らの刺激によって形成されるもの、ということを前提とした学説を指していっている。それが人々の意識を制覇し続けてきたので、能動的に純イメージを描き、それをリアルに知覚するという人間の精神作用の側面が、これまで見逃されてきたのだ——と彼はいっているわけである。

もし、それでもってマズローのいう至高体験の由来をも説明できるならば、それは証明されたといふべきでしょう。

では、マズローのいうタイプはウイルソンの原理でもってどう意味理解されうるか。彼のいう自己実現がなったというのは、理想だったにすぎない純イメージが、現実のものと化したということになる。

これがなると、人の心理には何が起きるでしょうか。突然自信が湧くでしょう。そしてその勢いで、彼の内にある他の純イメージにも、リアリティが感じられてしまうでしょう。日常的な言い方をすれば「もう何だって出来るぞ！」という気に突発的に成れるわけです。

この事態は、事後的に起きるものです。そしてこれが（リアルな）意味の奔流を引き起こす。歓喜がおとずれる。マズローの観察していた至高体験は実はこれだった、ということになります。

このように、ウイルソンの見出した原因是、実は、マズロータイプのものをも含め、至高体験一般を法則的に説明できるものだった、といえるでしょう。けれども、この説明は、筆者がなしたもののです。ウイルソンはそのことを敢えて直接言葉で明示することはしていません。彼のこうした奥ゆかしいとでもいうべきところは、結果的に読者を煙に巻き、その主旨の把握を困難にもしているといえそうです。

## まとめと展望

本稿では、現時点における欲求五段階説の内容を、整理し明らかにしました。

マズローは人間心理を五段階の基本的欲求のプロセスでもって捉えるという画期的なフレームを開きました。ウイルソンはそのうち、至高体験と

いう心理事象を重点的に検討することを通して、新しい境地を追加いたしました。

マズローは、至高体験は自己実現努力が実を結んだときに得られる副産物だとしていました。また、それ故に、出現した意味に驚かされることになるのだ、と判断していた。

対してウイルソンは、意志とイメージ力でもって、意図的に選び、つくることが出来る至高体験を追求しました。そして、それをもたらすのは新しい意味が突然次々に見出されることであるとし、それを論証しました。その出発点が認知対象への意識の集中にあることになるのですけれども、とにかくそれによる至高体験もあるのだ、と結論する（そしてそれが、マズロータイプのものをも説明しうる一般原理だった、というのは今述べたとおりです）。

マズローはそれを認めました。ですから、マズローの欲求理論はウイルソンによって少なくともこのように修正されたことになります。マズロー理論は今日現時点では、すでにマズロー＝ウイルソン理論になっていると筆者がいうゆえんであります。

だが、そこにはまだ問題意識が残ります。リアルにして新しいイメージ世界を見出すというのは、一つの認知行為です。至高の喜びを味わうというのは、喜びですから感情的な動きです。

前者の認知は、どうして、後者の歓喜の感情を触発するのでしょうか。筆者にはウイルソンの説明で、そのへんを追体験的に理解しきれたという感触がないのです。現状ではまだまだ、人間の心理はそういう風に出来ているのだ、といった程度の説明レベルでしかないように筆者には見えます。

確かに彼は一步考察を深めました。けれども、まだ、このあたりの説明をしつくしたとは思えな

い。次稿において、筆者はウイルソンが到達した地点のさらに奥にある心理ゾーンに足を踏み入れてみようと思います。

## 参考文献

- 日本マーケティング協会編『マーケティング・ベシックス〈第二版〉』同文館、2001年
- A. H. マズロー著、小口忠彦訳『〔改訂版〕人間性の心理学—モチベーションとパーソナリティ—』産業能率大学出版部、1987年 (Maslow, Abraham H. (1970), *Motivation and Personality*, second edition, Harper & Row)
- コリン・ウイルソン著、由良君美・四方田剛己訳『至高体験—自己実現のための心理学—』河出書房新社、1979年 (Wilson, Colin (1972), *New Pathways in Psychology: Maslow & the Post-Freudian Revolution*, Victor Gollancz Ltd., London)
- コリン・ウイルソン著、中村保男訳『アウトサイダー』集英社、1988年 (Wilson, Colin (1956), *The*

- Outsider*, Victor Gollancz Ltd., London)
- G. W. オルポート著、今田恵監訳、星野命・入谷敏男・今田寛訳『人格心理学』(上) (下)、誠信書房、1968年 (Allport, Gordon W. (1961), *Pattern and Growth in Personality*, Holt, Rinehart and Wilson)
- デニス・マクウェール著、山中正剛監訳、武市英雄・松木修二郎・山田寶・山中速人訳『コミュニケーションの社会学—その理論と今日の状況—』川島書店、1979年 (McQuail, Denis (1975), *Communication*, Longman Group Limited)
- T. H. リーハー著、宇津木保訳『心理学史』誠信書房、1986年 (Leahy, Thomas Hardy (1981), *A history of Psychology: main currents in psychological thought*)
- H. C. ワレン著、矢田部達郎訳『心理学史』創元社、1951年 (Warren, Howard C. (1920), *A History of the Association Psychology*, Charles Scriber's Sons)

(2002年5月29日経済学会受理)